

師弟のちぎり

海を人がみている、人を富士がみている、というのがこの辺の風景である。車返し（静岡県駿東郡沼津町字三枚橋附近の昔の地名）の官道。

正嘉二年の一月六日に岩本の実相寺に入蔵した聖人は、いま鎌倉をさしての帰り道である。

入蔵して一か月後の二月十四日に、聖人の御父妙日御逝去の報が到来したが「棄恩人無為真実報恩者」の言葉に従って、聖人は帰郷なさらなかったのであるから、その御心中は如何ばかりであつたろう。使いの者の口から、まだまだ東条左衛門尉の怒りはとけず、聖人が生家に帰れば命のあぶないことを告げ、大事な仕事の途中であるから、帰郷は暫時延ばされよとの御母梅菊女からの言葉が告げられたのであつた。

——一説には岩本入蔵を正元元年（正嘉二年の次の年）とするのがある。即ち帰郷後岩本に入蔵とする。次ぎに入蔵中帰郷してまた入蔵したという説もある。筆者注——

岩本実相寺の閲経中に聖人は「一代聖教大意」「一念三千法門」「守護国家論」「災難対治

抄」等々の十篇の著作をなされ、また実相寺の学頭智海法印の請いによって、天台大師の三大部（摩訶止観、法華玄義、法華文句）の講義をなされたのであった。まる二か年あしかけ三年の岩本実相寺滞在中の閲経は立正安国論の一大雄篇となつて聖人の生涯を支配したが、三大部御講義といひ御事蹟も後年偉大な実を結んだのである。

即ち、岩本実相寺の学頭智海は後に宗旨を改めて日源（中老の一人）となり、またあしかけ三年の間、聖人の身の廻りを、学頭の命令によつてお世話申した小僧は、後年「日蓮一期之弘法白蓮阿開梨日興に之れを附嘱す」といわれた日興上人である。そして日興上人の化導は日秀日弁日賢日位等々の英才を輩出し、日蓮正宗信徒たるものの忘れてはならぬ熱原の三烈士もここから出たのである。その他南条次郎時光を始め富士山麓にすむ諸豪族の信仰帰依は特筆すべきものがある。

今日においても、富士山大石寺、北山の本門寺、西山の本門寺、妙蓮寺、小泉の久遠寺等これを富士五か本山と通称するが、これ等の寺々はその創立の功績は日興上人の御感化にゆづつても、その源は聖人の岩本実相寺閲経にあつたことは勿論である。

一切経は鎌倉には鶴が岡の八幡宮に所蔵されておるが、鎌倉で閲経されずに岩本に來られたことは、鶴が岡の別当隆弁僧正は三井の園城寺学派の人であり、聖人は叡山学派の人であるから、同じ横川の流れをくむ岩本の実相寺に閲経されたといわれておる。

しかしながら「富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり」との日興上人への御相承に現われた所謂富士戒壇の理想は聖人の胸中に早くも蔵されて、富士山麓地帯の地理的研究や信仰状態の調査もあつて、この岩本の実相寺に來られたと筆者は拝察いたしたい。

聖人の御理想は一天四海皆帰妙法広宣流布にある、よつてその立教開宗もその御理想にふさわしく、一天を照破する旭が森の大日輪を証人としての開宗の事実を思うならば、富士山に本門寺建立の富士戒壇はその結論である。岩本の実相寺閱経は、その結論を産み出すべき下檢分と申したいところである。又実相寺はその後聖人が身延入山の砌り、この寺を訪れた時改宗して日蓮門下に投じた。

さて車返しの街道をゆく聖人を、最前から追いかけている小僧があつた。年令は十四、五歳ぐらいである。

「お聖人さま」

「おう」

聖人は声とともに振り向いた。

「これは甲斐房ではないか」

「はい、岩木実相寺の甲斐房であります」

「そなたには滞在中いろいろとお世話になったが、してまた、どうしてここへ」

「実はお願いの筋がございまして、今日は一日中お聖人さまの後を追いかけておりました。お聖人さまの足の早いこと」

額の汗をふきふき甲斐房はいった。甲斐房の額にはぬぐうてもおちぬ七つのほくろがある。このほくろがこの少年を出家にしたようなものである。そのほくろの形が北斗七星に似ている。北斗七星は常に天のいただきにあつて、我が罪科を少しもかくすことなしとの意味があるという。

生れた時にこの少年の父は、額のほくろをみて、

「この子奇相あり、若し出家すれば、天晴れ名僧智識となるであらう」と叫んだといわれておる。

少年は山梨県南巨摩郡大井の人で、父を大井橋六といい、母は由井氏という。母は一夜身に日光を浴び、腹に白蓮を生じた夢をみてただならぬ身となり、寛元四年（聖人二十五歳叡山遊学時代）三月八日この少年を生んだのである。

しかるに不幸にして早く父を失い、母もまた綱島九郎太郎（現在の神奈川県東横沿線の綱島）に再婚したので八歳の時、外戚の駿州河合入道に伴われて、岩本実相寺に至り、住職播磨律師に謁してその弟子となり、木年十五歳で、甲州の産なるが故に甲斐房といわれておった。

「願とは何事だな」

聖人は脚をとどめて、慈愛の眼差しを甲斐房にむけた。

「お聖人様のお弟子になりとうございます、私を鎌倉につれて行って下さいまし」

甲斐房は必死の眼差を聖人に向ける。

「そなたの御師匠は承知かなあ」

「学頭様のお言葉によって御師匠様には相談はいたしませんでしたが、学頭様のすすめでござい
ます」

「学頭智海法印のすすめによるというか」

「はい。学頭さまも内心は御聖人さまのお弟子になりたいが、学頭職の手前、軽々しく振舞う訳にはゆかぬ。お前はなんと言うてもまだまだ若い、お聖人さまのお弟子に加えて貰いなさい、といわれました」

「それでこれまで追いかけてまいったのか」

「はい、御聖人さまに御給仕を申し上げておる中に、自分の心に私の御師匠様はお聖人さまとひそかにきめておりましたが、学頭様が私の心の中をみぬかれまして、お聖人さまのお弟子になるようすすめて下さったので御座います。だが、実相寺の中でお願い申すことは出来ませんので、今日の御出発の日を心まちに待っております」

「さようか、年に似合ぬ勇猛な沙弥じゃなあ、よろし鎌倉につれてゆくぞ」

「有難うございます」

聖人のこの時の一言から、鎌倉に到着すると

「汝は勇猛である、精進である、能く大信心に住して、我が法門を興せ」と言われてこの少年の名を日興と賜ったのである。